

## Towards End

— Howards End における "connect" をめぐる倫理的雑考

齋藤 兆史

## 1

言葉が先か、認識が先か、私は知らないし、そのような言語現象の始原が、時代と社会とそして生活とにがんじがらめにされた我々の脳髄の中から容易に割り出せるとも思わない。言葉をもって言葉を語るという行為自体が、どだい言語活動の、否、文学の限界であって、「メタ言語」などとシャレてみたところで、事態はいっこうに変わりはない。

いかに抽象的な言葉であっても、我々がそれを認識するためには、まず心像を形づくらねばならない。そして認識の根本となる心像というものは人それぞれ違うものであるから、せいぜいのところ、我々はお互いの心像の最も近い部分を縫い合わせながらコミュニケーションを成り立たせるしかない。言うまでもないことだが、例えば「自由」という言葉一つをとっても、人によって全く違うイメージを持っている。そこで、「人間の行動や物体の運動に関して外的拘束や障害がないこと」と定義して、今度こそ「自由」の鮮明なイメージが共有できたと信じることができれば、これはおめでたい話だ。「人間」とか「物体」とか「外的拘束」とかいう言葉のイメージが万人共通だという保証はどこにもないのである。言葉ははなはだ頼りないものだ。

言葉といふものに重きを置けば置くほど、私は言葉の力なさ、不自由さを感じる。自分等の思ふことがいくら言葉で書きあらはせるものではないと感ずる。そこで私は、物が言ひ切れない。

(島崎藤村『市井にありて』より「言葉の術」)

西洋において言葉に対する不信を真先に表明したのは、おそらくニーチェであろう。

言葉は事物の、それら相互の、また私たちの相対関係にとつての象徴にすぎず、絶対的真理にはなんらふれるところがない。

(『ギリシア人の悲劇時代における哲学』)

人間が事物の概念と名前とをく(永遠の真理)として長い時期を通じて信じて来たことによって、彼は動物よりも自分を高いとしたあの誇を身につけたのである。彼は実際言語をもっているのは世界の認識をもっていることだと思った。言語の形成者は、自分が事物にただ記号を与えるだけだと信ずるほど謙遜ではなかった。(『人間的な、あまりに人間的な』)

作品にせよ批評にせよ、20世紀の文学が言語に対する大いなる懐疑と同時に、その本質を究明したいという願望を、その底に持っていることは疑いようのない事実である。そして言葉と現実との差異について論究することは、現代において文学に携わる人間の常識、いやむしろ強迫的行為のように思われる。しかし、言葉による論理で言葉をつきつめて行く時、我々はその行為の本質に根ざす運命をどうしても免れるわけにはいかない。言葉とイメージとが空回りをはじめた時、これ以上は認識不可能という暗黒の深淵に我々は臨んでいることに気づく。道は二つ。あくまでそこに踏みとどまって、現実という重い外套を脱ぎ捨てた記号の軽快な踊りを楽しむか、あるいはそこから引き返し、不自由な言葉を拾い上げて、もう一度人間世界の写実画にとりかかると。藤村は後者を選んだ。そして彼が<家>の没落と崩壊の歴史を描き出しているちょうどその頃、同じ道を選んだ一人の英国作家が、書き上げた小説の冒頭に謎めいた文句を書き記していた。

'Only connect ...'

## 2

どんな作家にも、作品を書くにあたってのヴィジョンというものがあるだろうが、それがなかなか他人には理解し難いものであることを知りつつ、なおかつそれをできるだけ具体的・即物的なコンテキストで包んで読者の前に差し出すのが、作家の良心というものであろう。そしてフォースターが'connect'という理念を理解させるために、いかに周到な注意を払っているかを見る時、我

々はどうしてもこの作家の良心に応えたいと思う。そのためには‘connect’という概念が顔を出すいかなるパッセージをも見のがしてはならない。(1)

‘I’m connected with a leading insurance company, sir. I receive what I take to be an invitation from these – ladies’ (he drawled the word). ‘I come, and it’s to have my brain picked. I ask you, is it fair?’

(*Howards End*, Penguin Books, XVI, p.147.)

(2)

ドイツ人の血を引く教養豊かなシュレーゲル姉妹と、典型的なイギリスの家庭であり、実務主義的なウィルコックス家との係り合いを中心にして、この物語は書かれている。そしてこの二つの家庭を心ならずも一つの事件の中に巻き込んでしまう人物が、レナード・バストという保険会社の貧しい下級事務員である。彼は、ある音楽会の会場でたまたま隣りに座っていたヘレン・シュレーゲルが、間違えて彼の傘を持ち帰ってしまうという出来事をきっかけに、シュレーゲル姉妹を知るようになる。レナードが二度目にシュレーゲル姉妹を訪れた直後、彼女たちはウィルコックス氏から、レナードの勤めている保険会社の経営が危いらしいという不確実な情報を得る。レナードの先行きを案じたマーガレットとヘレンは彼をお茶に招待し、会社をやめた方がよいと忠言するが、彼はそれを聞き入れようとしない。予想もしなかった彼女たちの言動に愕然として、彼は帰ろうとするが、そこにウィルコックス氏が現われる。先に引用したパッセージは、このようなコンテキストにおいてレナードがウィルコックス氏に向かって発した言葉である。

‘You are the man who tried to walk by the Pole Star.’

More laughter.

‘You saw the sunrise.’

Laughter.

‘You tried to get away from the fogs that are stifling us all—away past books and houses to the truth. You were looking for a real home.’

‘I fail to see the *connection*,’ said Leonard, hot with stupid anger. (XVI, p.148.)

動揺しているレナードに、なおマーガレットは説得を続ける。‘walk by the Pole Star’とは、レナードが北極星を捜し求めて一晩中歩き続けたというエピソード

(p. 125-7)を指しているが、その事と、会社の経営が危いからやめろという忠言が、一体どういう関係にあるのか、レナードには理解できない。しかし、マーガレットのイマジネーションの中では(あたり前のようだけれど、ここが重要な所なのだ)両者は密接に結びついている。彼女は、北極星を捜し歩いたという彼の行為の中に、「我々を息苦しくさせる霧」、すなわち現実の生活から脱け出して「本当の住み処」を見つけようとする願望を読み取るのである。

‘... We did not have you here out of charity – which bores us – but because we hoped there would be a *connection* between last Sunday and other days. What is the good of your stars and trees, your sunrise and the wind, if they do not enter into our daily lives? ...’

(XVI, p.148.)

現実の生活と詩的な世界とが常に結びついていなければならぬとマーガレットは考える(後に出てくる「散文的なものと情熱的なものとの連結」)。土曜の晩から日曜にかけてレナードの目に映り、肌に触れた星や木々、日の出、風、そういうものが、もし日常生活の中に入っていくことがないとしたら、何の意味があろうか。彼女はレナードの「詩的な世界」を消失させないために、何とか彼の現実の生活を救いたいと思うのである。

(1) 本論において、私は *Howards End* の第一のキーワードである‘connect’(あるいは‘connection’)という言葉が使われている箇所を一通りピックアップしたが、それらすべてについて論及しているわけではなく、本論の各章における引用と章の内容とは、必ずしも関係があるとは限らない。

(2) 以下、原文による引用はすべて *Howards End* からのものである。ローマ数字はこの小説の chapter 数を表わし、ページ数はペンギン版による。また、それぞれの引用の中で‘connect’(あるいは‘connection’)をイタリックにしたのは筆者である。

3

It is jealousy, not love that *connects* us with the farmyard intolerably, and calls up visions of two angry cocks and a complacent hen.

(XVI, p.152.)

シュレーゲル姉妹の忠告の真意を理解せぬままにレナードが帰ってしまった後、ウィルコックス氏は多少軽蔑的な口吻で彼を評するが、それに対しマーガレットがレナードを弁護し始めたので、彼は嫉妬を覚える。そしてこの嫉妬という感情において、例えば一羽の雌鶏をめぐって二羽の雄鶏が争っているような「農場」と、我々人間とが connect している、と語り手は言う。嫉妬という感情において、我々は最も動物に近い。この箇所だけに関して言えば、そう単純に考えて問題はない。しかし、この小説の扉に 'Only connect . . . ' という呪文が掲げられていることと、今までに見てきたパッセージにおいて、connect を原点として、connect される物同志の座標的位置関係が微妙に異なっていることを考えあわせると、この小さな概念の中にぎっしり詰め込まれたフォースターの思想の、まだほんの片鱗しか見ていないことを、我々は認めざるを得ない。

## 4

Margaret greeted her lord with peculiar tenderness on the morrow. Mature as he was, she might yet be able to help him to the building of the rainbow bridge that should connect the prose in us with the passion. Without it we are meaningless fragments, half monks, half beasts, *unconnected* arches that have never joined into a man. (XXII, p.187.)

It did not seem so difficult. She need trouble him with no gift of her own. She would only point out the salvation that was latent in his own soul, and in the soul of every man. Only connect! That was the whole of her sermon. Only connect the prose and the passion, and both will be exalted, and human love will be seen at its highest. Live in fragments no longer. Only connect, and the beast and the monk, robbed of the isolation that is life to either, will die. (XXII, p.188.)

ヴァージニア・ウルフによれば、フォースターの目の前にあった問題は、「現実の事物」とその事物の「意味」をいかに「連結」させ、そして、読者に決して不信の念を抱かせることなく、いかに彼らの精神をしてその両者の間にある溝の上を渡らしめるか、ということであった。<sup>(3)</sup> P・L・トラヴァースによれば、フォースターの言う

'connect' とは、「情熱的な懐疑」と「意味への願望」を、個人と共同体を、知っているものと未知のものを、過去と現在を、そしてその両者と未来とを「連結」することだと言う。<sup>(4)</sup> スコットジェイムズのように、'connect' をプロットの展開という観点に引きつけて解釈しようとする批評家もいる。<sup>(5)</sup> また *English Literature and British Philosophy* という本の扉に引用された 'Only connect . . . ' は、文学と哲学とを結ぼうという意図の表明らしい。<sup>(6)</sup> ところで、P. N. フェーバンクをはじめとする多くの批評家たちが、この小説の主題を「散文的なもの」と「情熱的なもの」との「連結」であるとしているのは、つまり、この章の冒頭に引用した二つのパッセージの持つテーマ的な臭いの故にはかならない。我々は小説の扉に掲げられた例の呪文を思い出す。'Only connect . . . ' だが一体、何を？ 読者が抱きつけてきた疑問の解答が、まさに目の前にあるではないか。我々は、一瞬、'connect' の正体をつかまえた、と思う。そこでこいつをひっ下げた帰るわけだが、この一見気のきいた獲物が、実はもう一つの謎でしかないことを真先に看破するのは、おそらく批評家でも詩人でもなく、現実の「生活者」であろう。散文的なものと情熱的なものを連結せよ。こんな禅問答が生活のための何の足しになるか。フォースターが現実面に密着した思想家であることを考えあわせる時、<sup>(7)</sup> このような問いの発し方が、決して的はずれたものではないことが解るであろう。フォースターはそのような詩的なイメージを読者の前にブラ下げて得々としているような作家ではなく、実を言うと、「散文的なものと情熱的なものとの連結」<sup>(8)</sup> というのは、作品のテーマの抽象的あるいは象徴的な表現であるにすぎず、'connect' の正体はこの段階ではほとんど明らかにされていないのである。

(3) Virginia Woolf, 'The novels of E.M. Forster'

(4) P.L. Travers, 'Only Connect' in *Only Connect: Readings on children's literature*, edited by Sheila Egoff, G.T. Stubbs, and L.F. Ashley, (Oxford Univ. Press, 1969).

(5) R.A. Scott-James, 'The year's best novel', *Daily News*. なお(3)と(5)は Philip Gardner (ed.), *E. M. Forster, The Critical Heritage* (London & Boston; Routledge & Kegan Paul, 1973) による。

(6) S.P. Rosenbaum (ed.), *English Literature and British Philosophy* (Chicago & London; The University of Chicago Press, 1971).

- (7) 例えば *Two Cheers for Democracy* を見よ。  
 (8) この小説において、フォースターは 'connect' という語に、きわめてノーマルな意味から、後に説明するような彼独特の意味まで、多彩に盛り込んでいる。ここでは一応「連結」という訳語を用いたが、この語を当てると、その豊富な意味合いがまるで削がれてしまう。これは翻訳の限界でもあるのだが、本論は 'connect' に正確な訳語を当てることが目的ではないから、以後の章では 'connect' とそのまま横文字で記すことにする。*Howards End* からの引用だけを原文のまま載せたのも、以上のような理由による。

## 5

The obvious dead, the intangible alive, and —  
 no connection at all between them!

(XXIII, p.200.)

かつて私は、作品の中に二元対立を見ようとする批評の陥りやすい誤謬について簡単に論じたことがある。つまり、作品の中に一つの要素を規定することは、同時にそれを否定する要素を規定することでもあるから、二元対立というものは意図的に作り出すことができるということである。その性質上、最も容易に作り出せるのは、論理的に言うと、「現実」と「非現実」、「日常的」と「非日常的」などの矛盾 (contradictory) 概念による二元対立であり、それに次いで「母性的」と「父性的」、「善」と「悪」などの反対 (contrary) 概念による二元対立である。例えばヴァージニア・ウルフの作品を評して、日常的なものと非日常的なもののが交錯し合っている、などと言ってみたところで、これは実は何も語っていない。なぜなら、「日常的なもの」と「非日常的なもの」が交錯し合っているというのは現実のあたり前の姿であり、「日常的なもの」を概念的に規定することによって「非日常的なもの」が否定概念として乖離する、その論理のプロセスをひっくり返したレトリックにすぎないからである。批評の方法としての二元論のもつ説得力の裏に、こうした詭弁の構造が隠れているのは稀な事ではない。その方法論的な直直さと誤謬の危険性とを念頭に置いた上で、それでもなお二元論を用いて作品を読み解かなければならない場合というのがある。それは、二元対立がページを繰っている批評家の認識パターンの中にあるのではなく、作品の側にある場合、つまり、作品自体が明らかに二元対立を軸として書かれていると考えざるを得ない場合である (もっとも、二元論を好む批評

家は皆そう考えるのかも知れないが)。そしてまさしく *Howards End* はそういう解題の仕方をする必要とする。フォースターの他の作品、例えば *Where Angels Fear to Tread*, *The Longest Journey*, *A Passage to India* においても、それぞれのテーマの象徴的縮図が、ソーストン対モンテリアーノ、ケンブリッジ対ウィルトシャー、イギリス対インド、などの地理的・二元対立となって現われているという単純な事実を見ても、我々はフォースターが二元対立という図式を好んで用いる作家であることを認めないわけにはいかない。そして *Howards End* においては、詩的なものと情熱的なもの、ドイツ的なものとイギリス的なもの、定住性と移住性、男性的なものとの女性的なもの、芸術と人生、これらさまざまな二元対立が、時にシュレーゲル姉妹とウィルコックス家の、マーガレットとヘンリーとの、あるいはシュレーゲル姉妹とレナード・バストとの関係において現われる。ところで「対立」をまのあたりにした時、これを何らかの形で解決しようとするのは人間の本能だろうが、批評において、この対立解消に恰好の図式を与えてくれるのは、言うまでもなくあのヘーゲル弁証法というやつである。そこでこれを用いて *Howards End* を解釈してみる。この作品の中で対立し合う要素は、事件の展開の中で connect していき — この時 'connect' はアウフヘーベンと近似した概念として解釈される — その弁証法的発展、総合のシンボルがハワーズ・エンド邸である。しかし、これは正しくない。純粋な観念の世界で組み上げられた定式をリアリズムの世界に引きおろしたことが、まず第一の誤り。さらに、そのような観念的な論理のプロセスに与する概念として 'connect' を解釈したことが、第二の誤りである。

## 6

Her evening was pleasant. The sense of flux which had haunted her all the year disappeared for a time. She forgot the luggage and the motor-cars, and the hurrying men who know so much and connect so little. . . . But an unexpected love of the island awoke in her, connecting on this side with the joys of the flesh, on that with the inconceivable.

(XXIV, p.204.)

文学の使命とは思想の表明ではなくて問題提起にある、というような言い方をする人もいるが、哲学や倫理学と比較した場合の文学の特質 (あるいは利点) を論ずるとすれば、それは文学が必ずしも作家の頭の中にある表象

の投影図である必要はないという事であろう。哲学者は自分の著作の中で、唯物論者であると同時に観念論者であることはできない。さまざまな哲学的立場の可能性及び妥当性を、たとえ寛容に認めたにせよ、哲学者が語るものはあくまで自分の思想でなければならない。しかし、小説家はペンの力によってキリスト教徒になり、無神論者になり、純情可憐な女学生になり、現実主義的な八百屋のおやじになる。彼は色とりどりの思想の可能性を陳列台の上に並べてみせることができる。そのうちのどれか一つが作者の紛う方なき本心である必要はない。ところで、このような本質的な問題に加えて、文学の関心の対象が作品の芸術性、技巧性さらには言語性に集中するようになってからというもの、作品の中に作者の思想を探索するという批評の方法も、あるいはそういう読み方を読者に要求するような作家も、一昔前のいわば骨董品になってしまった感がある。そして、そういう意味で言うなら、フォスターはまさしく骨董品、作品の土台としてまず自分の思想を打ち据える古風な作家である。

少数の例外はあるけれども、批評家たちはフォスターの思想の持ち得る美点に熱を入れることなく、彼の作品を解題し、賞讃するようになってきている。しかしながら、フォスターは紛れもなく思想的な小説家であり、ロレンスの小説に負けず劣らず、彼の作品の中に教訓的、倫理的な内容が盛り込まれている事は、はっきりと見てとれる。<sup>(9)</sup>

登場人物の一人であるマーガレットの言葉が、そのまま非人称的な定言命法として作品の扉に記されていることは、実に重要な意味を持っている。つまり、‘Only connect’は可能性としての思想ではなく、フォスター自身の思想、それも現実生活に則した倫理思想なのである。「格率が普遍的法則となることを、その格率を通じて汝が同時に欲し得るような、そういう格率に従ってのみ行為せよ」とカントは言ったが、彼がその言葉に込めた「祈り」を、我々はフォスターの定言命法の中にも見ることができる。

(9) Frederick C. Crews, *E.M. Forster: The Perils of Humanism* (Princeton, New Jersey; Princeton Univ. Press, 1962) p.5.

If Henry had shown real affection, she would have understood, for affection explains everything. But he seemed without sentiment. The

‘thundering good sort’ might at any moment become ‘a fellow for whom I never did have much use, and have less now’, and be shaken off cheerily into oblivion. Margaret had done the same as a schoolgirl. Now she never forgot anyone for whom she had once cared; she *connected*, though the *connection* might be bitter, and she hoped that some day Henry would do the same. (XXV, p.207.)

ウィルコックス氏は、イーヴィー・ウィルコックスの結婚式に先立って、自分の婚約者であるマーガレットに彼をとり巻く人間関係について話しておいた方がいいと考える。彼は「誰々は実にいい奴（a thundering good sort）だ」という言い方をするが、マーガレットは、その「実にいい奴」が、実際に会ってみると、無頼漢であったり退屈な男であることを知ってがっかりすることがある。もしヘンリーが彼らに対して本当の愛情を示してくれたら、彼女も納得したであろう。しかし、その「実にいい奴」は、ややもすると「今まで自分には用がなく、今も一層用のない人間」であり、喜んで忘却の中に捨ててしまうことができるような人間なのだ。女学生時代のマーガレットにも同じような経験があるが、今では、昔一度でも好きだった人を決して忘れることはない。彼女は connect したのである。たとえその connection が辛いものであったとしても。そして彼女は、ヘンリーもいつの日か同じ事をしてほしいと願っていた。

ここで ‘connect’ についてのもう一つの誤解を解いておかなければならない。その誤解とは、‘connect’ が人と人との結びつき、つまりフォスターの思想の重要な一環を成す人間関係の倫理であるとする考え方である。Howards End に限らず、フォスターのほとんどの作品が人間関係の倫理を含んでいることは言うまでもない<sup>(10)</sup>が、重要なのは、彼が問題としたのは、あくまで人間同志がいかに結びつくか、あるいは結びつきが可能か否かということであって、これが必ずしも人間同志が愛し合い、結びつくことが大切だ、という絶対的な価値の提示を意味しないということだ。例えば *A Passage to India* のラストシーンを見てもわかるように、フォスターは人間と人間が民族や階級を超えて単純に結びつき得るものだとはいはない。ブルームズベリーの理性はヒューマンズムを捨ててはいないが、それは愛の楽園を説く態度とは根本的に異なっている。ブルームズベリー・グループの思想的基盤が窮極的に不可知論であったことは、もう一度注意しておく必要がある。だから、「人

間同志互いに連結せよ」——‘connect’を人間関係の意と誤解すれば、‘Only connect’は当然こういう命題になる——というような主張を、フォースターが手ばなしでなし得たはずがない。この章の冒頭に掲げた引用においても、その最後の部分を「彼女は人間同志の結びつきを成就したのである。たとえその人間関係が辛いものであったとしても」という意味に解釈することは、一見文脈にしっかり合っているようで、実は大変な誤解なのである。

ところで、connect = <人間同志の結びつき>とする誤解の裏には、フォースターがG. E. ムアの倫理思想の影響を受けているとする見方があるように思われるので、一言触れておくことにする。ムアの *Principia Ethica* (1903) がブルームズベリー・グループの人々に大いなる衝撃を与え、彼らをして思想的にムアの弟子たらしめたことは周知の事実だが、この書物の中で特に彼らが絶賛した最終章‘The Ideal’の中で、ムアは、およそ我々が知り得る限りで最も善なるものは人間同志の結びつきと審美的な快楽である、と述べている。<sup>(11)</sup> connect がこの論述と呼応していると考えるのは、一見実に都合がよいのだけれども、これははなはだ疑問といわざるを得ない。なぜなら、フォースター自身が *Principia Ethica* を読んでいたか、いないかという問題以前に、この書物の倫理的な価値とは、「善」の思想及びそれに伴うさまざまな誤謬を、あくまで厳密な言語分析（あるいは論理分析と言った方が適切か）によって解明したという、そのメタ倫理学的方法論にあるのであって、人間同志の結びつきと審美的な快楽が我々の知り得る限りでの（ここは重要）最高善であるというのは、確かに一つの論拠ではあるけれども、この書物全体が積極的に打ち出している主張ではないからである。<sup>(12)</sup>

(10) 例えば、*Two Cheers for Democracy* 中の‘The Challenge of Our Time’と題するエッセイの中で、彼自身次のように述べている。「気質的には、私は個人主義者である。職業的には、私は作家であり、そして私の書くものは、人間関係と個人の生活の重要性を強調している。なぜなら私はその二つのものの価値を信じているからだ。」

(11) G.E. Moore, *Principia Ethica* (Cambridge Univ. Press, 1903) p.189.

(12) *Principia Ethica* を注意深く読んでみると、上記の論述だけが、この書の論理の流れから微妙にズレていることに気づく。すなわち、終始論理主義的なトーンで展開されている本書の中で、そこだけが経

験論的なトーンで書かれているのである。先に私は「我々の知り得る限りでの」という条件が重要であると指摘しておいたが、ムアは人間同志の結びつき（あるいは愛情）と審美的快楽が善である（Human intercourse [personal affection] and aesthetic enjoyments are good.）と言っているのではなくて——もしそうだとしたら、ムア自身が彼のいう naturalistic fallacy に陥ることになる——それらは我々が経験上知っているうちで善なる要素を最も多く含んでいる、と言っているのである。

## 8

Over his children he felt great tenderness, which he did not try to track to a cause; Mrs. Wilcox was too far back in his life. He did not connect her with the sudden aching love that he felt for Evie. Poor little Evie! He trusted that Cahill would make her a decent husband.

(XXIX, p.246.)

A. C. ベンソンがフォースターに宛てた手紙<sup>(13)</sup>の中に重要な指摘がある。彼の母親はヘンリー・シジウィックの妹（姉？別にどちらでも問題ではない）であるが、<sup>(14)</sup>彼女に *Howards End* を読ませたところ、彼女はこの作品の主意がプラグマティズムではないかと言ったという。彼女によれば、この作品においては、状況がそれに応じて倫理を形づくっている、つまり、確固たる倫理の規範があるのでなくて、それぞれの状況に応じて願望と衝動とがよりよい物を追求していくうちに、そこに現実における真の倫理が生まれている、というのである。

彼女の言うとおり、この作品の中には「汝の隣人を愛すべし」とか「他人を決して手段として扱わず、目的として扱え」というような道徳律はどこにも存在しない。それが混沌とした現実の姿だと言ってしまうまでもだが、しかし、何かある、と我々は感ずる。例えばヘレンがレナードを憐むあまり、彼に肩入れしてマーガレットやウィルコックス氏を遠ざけてしまった時、あるいはウィルコックス氏がヘレンとレナードの関係を不純であるとし、世間体を気にしてハワーズ・エンド邸に一晚泊めてほしいというヘレンの申し出を拒否した時、そのような彼らの行動を戒め、一方でウィルコックス夫人とマーガレットの存在を全的に許容する何かがある。確かにそれは確固としたモラル・コードと言えるものではないが、それでもなお強力な判断の拠り所となり得べきもの、流動的な状況の倫理学が厳として存在している。これが我々が問題にしている connect の思想にほかならない。

そして、*Howards End* に現われた思想がプラグマティズムであるというのは、極論であるにもかかわらず卓見であって、connect の倫理思想はプラグマティズムに非常に近い位置にある。それはまず第一に、私が再三述べているように、connect が現実に密着した思想であるという点において、第二に、それが常識あるいは平衡感覚を重視する点において、そして第三に、その中庸性においてである。

(13) 前掲 *E.M. Forster, The Critical Heritage*, p.152.

(14) シジウィックはイギリスの倫理学者。思想的には、ミル、ベンサム、カントの影響を受け、イギリス功利主義の最後の代表者であり、認識論上は相対主義の立場をとる。ベンソンによれば、彼の母親はシジウィックの思想的影響を強く受けていたと言うから、*Howards End* についての彼女の評価を考える際に、功利主義とプラグマティズムとの関係を無視するわけにはいかない。プラグマティズムは功利主義を批判しながらも、基本的にはその伝統を継承するものであり、その思想的類似性をふまえた上で彼女の指摘をどう解釈するかはまた問題だが、ここでは上のような事情を附記するとどめる。

## 9

The day of her visit was exquisite, and the last of unclouded happiness that she was to have for many months. Her anxiety about Helen's extraordinary absence was still dormant, and as for a possible brush with Miss Avery — that only have zest to the expedition. She had also eluded Dolly's invitation to luncheon. Walking straight up from the station, she crossed the village green and entered the long chestnut avenue that connects it with the church.

(XXXIII, p.262.)

有史以来、即物的な生から遠心的に分化してきた種々の思想を、逆に向心的に結びつけるような運動性を持つ思想を、私は広い意味で中庸思想と呼びたい。そしてそれは対立し合う諸々の倫理的立場を同時に認める寛容な論理——したがって必然的に相対主義<sup>(15)</sup>——と、現実的には、極端を避け中間の道を選ぶという穏健な態度を特徴とする。

プラトンは調和の美を説いた。アリストテレスは徳の特性を中庸 (mesotēs-) であるとし、行為における善

について「実体にあつてはたとえば神や理性が、性質にあつてはもろもろの徳が、数量にあつては適度が、関係にあつては有用ということが、時間にあつては好機が、場所にあつては適地が」それを規定すると考えた（『ニココス倫理学』第1巻 第6章）。この考え方を現代に受け継いでいるのが実存主義的倫理学で、例えばボーヴォアールの言う「黄金の中間」（『両義性の道徳のために』）とは行為における中庸の徳にはかならない。イギリス的な経験論は多かれ少なかれ中庸的であるけれども、J. S. ミルの影響を受けたアメリカのウィリアム・ジェームズは、はっきりとした中庸思想を打ち出している。

私はプラグマティズムという妙な名前のものを、二つの要求を満たすことのできる哲学として提示する。それは合理主義のように宗教的でありながら、同時に経験論のように事実と密着していることができる。

(William James, 'The Present Dilemma in Philosophy')

ジェームズが marriage function とか go-between function とか呼ぶものは、この中和作用のことである。ついでにつけ加えておくと、日本においては、西田幾多郎がジェームズの radical empiricism と同時に中庸思想を受け継いでいる。

(15) connect をめぐる倫理的雑考と銘うった以上、「相対主義」という厄介な言葉は無雑作に使うことは許されないので、一言触れておくことにする。相対主義といっても、私が問題にしているのは倫理的相対主義であるが、さらにその中でも、例えば P. テイラーの分類によれば、社会的・文化的相対主義、心理的・状況的相対主義、理論的・論理的相対主義、方法論的相対主義などさまざまな立場の違いがある。これらは倫理的判断・言明が何に対して相対的であるかによる分類であるが、そのような議論は本論からは大きく離れるので、ここでは問題にしない。ただ、私の考える中庸思想は、倫理的相対主義の持つ寛容性の要求、つまり、複数の倫理規範を等しく妥当なものとして是認せよ、という主張を前提とするということをお願いだけである。

## 10

It was the presence of sadness at all that surprised Margaret, and ended by giving her a feeling of completeness. In these English farms,

if anywhere, one might see life steadily and see it whole, group in one vision its transitoriness and its eternal youth, *connect—connect* without bitterness until all men are brothers.

(XXXIII, p.264.)

connect を可能ならしめるためには、まず先に述べたような相対主義の上に立って、世に乱立する思想を公平に判断し得る裁判官となることだ。しかし、これは最低条件にすぎない。他人には他人の宇宙の体系があるということ、観念の上では理解することができたとしても、例えば全く価値観の違う人々と実際に接触して、なおかつマーガレットのように「世界を作るためには、あらゆる種類の人間が必要である (p. 112)」ことを認めることができるか。そこから適切な判断を導き出し、現実において connect を成就する力になり得るか。これは決して万人の能うところではあるまい。レナード・バストのように、「部分的には誰でも正しい (p. 145)」という中庸の目を持ち、情熱的なものと散文的なものと、あるいは芸術と実人生との親和力たる可能性を秘めたままで、社会の下敷きになってしまう不幸だっている。

再三述べているように、*Howards End* において connect という倫理思想を実践しているのはマーガレットだが、彼女の背後には言うまでもなくウィルコックス夫人がいる。ウィルコックス夫人は、例えば *A Passage to India* のムーア夫人のように、あるいはウルフの *To the Lighthouse* のラムゼイ夫人のように、物語の途中で死んでしまうが故に、逆に大きな象徴的な意味を持って作品の背後に存在する、そういう人物である。

Her withdrawal had hinted at other things besides disease and pain. Some leave our life with tears, others with an insane frigidity; Mrs. Wilcox had taken the middle course, which only rarer natures can pursue. She had kept proportion. She had told a little of her grim secret to her friends, but not too much; she had shut up her heart — almost, but not entirely.

It is thus, if there is any rule, that we ought to die — neither as victim nor as fanatic, but as the seafarer who can greet with an equal eye the deep that he is entering, and the shore that he must leave. (XII, p.111.)

彼女にあっては、存在そのものが中庸の美である。そし

てそういう彼女であるからこそ、マーガレットの内に、connect を成し得る資質と、connect された観念を現実に移し取ってゆく力を見出すことができた。

The friendship between Margaret and Mrs Wilcox, which was to develop so quickly and with such strange results, may perhaps have had its beginnings at Speyer, in the spring. Perhaps the elder lady, as she gazed at the vulgar, ruddy cathedral, and listened to the talk of Helen and her husband, may have detected in the other and less charming of the sisters a deeper sympathy, a sounder judgement. She was capable of detecting such things. (VIII, p.75.)

その力とはまさしく「健全な判断力(‘sound(er) judgement’)」だ。中庸思想が相対主義に脚する以上、何が中庸か、どこが中庸か、そして何を為すべきかという決定は、強力な論理によって導かれるのではなく、最終的に人間の直覚的な判断力、あるいはジェームズやデュエーイの言うような「常識」に委ねられることになる。この健全なる判断力が connect を成し遂げてゆくプロセスを、我々は具体的に見ていくことにする。レナード・バストに熱い同情を寄せ、自らの肉体すらも許してしまうヘレンよりも、何故マーガレットの方が ‘deeper sympathy’ の持ち主であるか — あるいは少なくともウィルコックス夫人の目には何故そう映るのか — 例えばそのような疑問もおのずと明らかになるであろう。

11

Henry, long pardoned by his wife, was still too infamous to be greeted by his sister-in-law. It was morbid, and, to her alarm, Margaret fancied that she could trace the growth of morbidity back in Helen’s life for nearly four years. The flight from Oniton; the unbalanced patronage of the Basts; the explosion of grief up on the downs — all *connected* with Paul, an insignificant boy whose lips had kissed hers for a fraction of time. (XXXIV, p.272.)

*Howards End* の中に ‘connect’ と並んで重要なキーワードが隠されている。それは ‘proportion’ あるいは ‘balance’ という言葉である。

‘... It’s then that proportion comes in — to live by proportion. Don’t begin with proportion. Only prigs do that. Let proportion come in as a last resource, when the better things have failed, and a deadlock — gracious me, I’ve started preaching!’ (VIII, p.83.)

‘You mean to keep proportion, and that’s heroic, it’s Greek, and I don’t see why it shouldn’t succeed with you. . . .’

(XXIII, p.195.)

Mrs Wilcox, that unquiet ghost, must be left to her own wrong. To her everything was in proportion now, and she, too, would pity the man who was blundering up and down their lives. (XXVIII, p.240.)

この世に存在するあらゆる価値が相対的である以上、肝腎なのはそのバランスである。複数の人間がいれば、必ず利害の対立が起こる。その時に、それぞれの利害のバランスを計算した上で、出来るだけ多くの人が満足するような結論を引き出すこと — 人はこれを功利主義と呼ぶだろうが、現実世界において正義を為そうとすれば、我々は多かれ少なかれ功利主義の原理に従わなければならない<sup>(16)</sup> — 中庸者の使命とは、これだ。

例えば、自分の崇拜する人物（思想家でも恩師でも恋人でもいい）に忠誠を尽くすことを自らの倫理規範とする男が、その人物の悪口をたまたま通りすがりに聞いて、その悪口を言っている人間いきなり殴りかかったとする。あるいは、恋愛を至上のものとする男が、恋愛の成就のために平気で友や家族を裏切ったとする。彼らはいずれも己れの信条には忠実であると言える。しかし、彼らは判断におけるバランス感覚を欠いている。彼らは自分の倫理規範が個人的で特殊なものであることに気づいていない。この世に生息する人間の頭数だけ主義・信条はあるだろう。だから、自分の信念を貫き通すということ自体が美德でないばかりか、現実の価値が相対性を前提としている以上、むしろ一つの定式化した倫理規範を絶対的に守り通すということは、本質的に矛盾を引き起こすことになる。正義感の強いヘレンが、弱者への憐みという、一見普遍的なモラル・コードに固執したために、この矛盾の中に落ちてしまうのである。

‘Helen is odd, very,’ agreed Margaret.

‘Not content with going abroad, why does she want to go back there at once?’

‘No doubt she will change her mind when she sees us. She has not the least balance.’

(XXXIV, p.272.)

ウィルコックス氏の忠言に従ったレナードはそのために失業してしまったが、氏は一向にその責任を取ろうとしない。このような事実を与えられた時、バランス感覚を欠いたヘレンの思考パターンが生み出すものはウィルコックス氏とレナードとの二律排反でしかないのである。彼女の道徳律は彼女にレナードを選ぶことを余儀なくさせるが、それは同時にウィルコックス氏に対する敵対を意味する。そしてこの図式に従う限り、彼女がバスト夫妻を保護すればするほど、ウィルコックス氏をとり巻く人々との軋轢を大きくしていくことになるのである。一方を愛するが故に他方を憎むこと、これは凡人の論理である。

(16) 例えば R.M. Hare, ‘Ethical theory and utilitarianism’, in *Utilitarianism and beyond*, edited by Amartya Sen and Bernard Williams (Cambridge Univ. Press, 1982); reprinted from *Contemporary British Philosophy*, edited by H.D. Lewis (London; Allen and Unwin, 1976) を見よ。

12

‘Ah, that greengage tree,’ cried Helen, as if the garden was also part of their childhood. ‘Why do I *connect* it with dumb-bells? . . .’

(XXXVII, p.291.)

OEDで ‘connect’ の項を引いてみる。

1. *trans.* To join, fasten, or link together: said either of the personal agent or of the connecting medium or instrumentality. Const. *to, with.*

日本語に訳せば、結ぶ、連結する、接続する……ということになるが、*Howards End* のテーマとしての connect-にこの意味を当てはめると、詩的な比喻以上に明確なものが見えてこない。もう一度確認しておく、フォースターの connect とは想像力の機能であり、なおかつ現実に即した働き方をし、そして具体的な決定に向かうものである。英語の ‘join’, ‘link’ あるいは日本語の

「連結」という言葉では、この微妙な意味合いが出せないのである。<sup>(17)</sup>しかしOEDをもう少し見てゆけば、フォースターの connect により近い定義を見つけることができる。

3.b. To associate in idea; to view or think of as connected.

例えばモームの *Of Human Bondage* の主人公フィリップ・ケアリが、パリで知り合った詩人から聞いたベルシア絨毯の意味に思い到った時、彼の想像力はベルシア絨毯の芸術的意匠と、人生が無意味であるという認識を結びつけたのである。あるいは我々が小説を読んで、登場人物の生きざまを己れの人生に照らし合わせ、自分も同じ罪を犯していたとって悔い改める時、我々は文学と人生とを connect するのである。もっと現実的のわかりやすい例を示そう。ここにA、B二人の男がいて、Aは時間に几帳面であるが、Bはルーズである。ある日この二人が待ち合わせをして、たまたまその日に限ってBの方が定刻に来ていてAが遅れてしまった。この時、Bがそれに腹を立て、その後の約束を果たさずして帰ったとしよう。約束の時間に遅れることは悪いことだ、という定理に従うとすれば、その悪に対して腹を立てて帰るという行為も不当とは言えない。しかし、現実において我々はこの理屈を納得するかというと、答えは否であろう。先に私は、一つの定式化した倫理規範に絶対的に従うことは、現実の相対性との間に矛盾を引き起こすと述べたが、Bの行為が不当でないという判断は、ある平面的な事実だけを拾ってきて、それを一つの定式に絶対的にあてはめたという誤謬によるものである。確かに行為を決定する際に判断の拠り所となる枠組みは必要であり、その骨子である諸々の倫理規範はそれぞれ正しい。しかし、それらは蓋然的に正しいのである。現実からその蓋然性を引いて残った部分がBには見えていない。そこを照らし出す「常識」の光がないために、Bは、今まで自分が何度も約束の時間に遅れて他人に不快な思いをさせ、ということと、自分が待たされて不快な思いをしたということとを同一次元で考えることができない、つまり connect できないのである。この場合の connect は、他人の立場で物事を考えるという小学校の教科書的な道徳——しかし確実に守られたなら、地球上の悪の半分は消え失せるであろう原理——と意味的には近いが、勿論これは最も単純で極端な例である。

状況設定をもう少し複雑にしてみる。ここにWという実業家がいる。彼は妻子ある身でありながら愛人を作り、

そのために妻を苦しめる。やがて妻が死に、Wは後妻Mを迎える。ある日MはWが過去に犯した不義を知らされるが、苦悩の末、彼女はWを許す。ところで、MにはHという妹がいて、彼女は妻ある男性と親密な関係になってしまいが、この時、Wは世間体を気にしてHのことを遠ざけようとする。さて、我々はこのWという人物をいかに評価すべきか。

(17) ここで私が言っているのは、あくまで作品のテーマとしての connect についてである。今まで見てきたように、この作品の中にはキー・ワードとして何度も 'connect' という言葉が出てくるが、それらすべてにフォースターが特殊な意味を込めているわけではない。

13

'Not any more of this!' she [Margaret] cried. 'You shall see the *connection* if it kills you, Henry! You have had a mistress — I forgave you. My sister has a lover — you drive her from the house. Do you see the *connection*? Stupid, hypocritical, cruel — oh, contemptible! — a man who insults his wife when she's alive and cants with her memory when she's dead. A man who ruins a woman for his pleasure, and casts her off to ruin other men. And gives bad financial advice, and then says he is not responsible. These men are you. You can't recognize them, because you cannot *connect*. ...' (XXXVIII, p.300.)

Wとは言うまでもなくウィルコックス氏、Mはマーガレット、Hはヘレンのことである。ウィルコックス氏が中庸者の身上とする柔軟な判断力に欠ける人物であることは、もはや疑う余地がない。ならば、フォースターの倫理観に従えば、氏は一体いかに行動すべきであったか、という問いが生じる。不確実な忠告によってレナードを失業に追い込みながら責任を回避した以上、せめてその償いは、自分の過去における不義をマーガレットが許したという判例を、ヘレンの情事に適用することによって、彼女を許し、ハワーズ・エンド邸に一晩だけ泊めてほしいという彼女の申し入れを受け入れる、という具体的な行為によってなされるべきだったのである。過去四年ほどのヘレンの生活は、彼女のイマジネーションの中で、ほんの一瞬だけ口づけを交わしたポール・ウィルコック

スに結びついていて(本論11章冒頭の引用参照)、ハワーズ・エンド邸がウィルコックス夫人にとって魂そのものであったように(p. 107)、それはヘレンにとってもかけがえのない思い出の場所、まさに「情熱の世界」にはかならない。そしてウィルコックス氏にとって単なる「家屋」でしかないハワーズ・エンド邸(p. 107)に彼女が宿泊するのを許すという、現実的／「散文的」な行為が、実は「情熱的なものと散文的なものを結びつける」一つの鍵であった。しかし勿論それを見抜くのは中庸者のみである。

‘But I cannot let this kind of thing continue without comment. I am morally certain that she is with her sister at Howards End. The house is mine — and, Charles, it will be yours — and when I say that no one to live there I mean that no one is to live there. I won’t have it.’ He looked angrily at the moon. ‘To my mind this question is *connected* with something far greater, the rights of property itself.’

(XLII, p.317.)

ウィルコックス氏は中庸者ではない。彼の頭の中には、二つの世界を鳥瞰する視点のもとより存在せず、彼にとってヘレンの申し入れを許すか許さないかということは、家の所有権という「散文的」な問題でしかなかった。

本論冒頭に引用したパッセージにおいて、我々は connect の最も現実的な相貌を見るに到った。

14

She [Margaret] could not assess her trespass by any moral code; it was everything or nothing. Morality can tell us that murder is worse than stealing, and group most sins in an order all must approve, but it cannot group Helen. The surer its pronouncements on this point, the surer may we be that morality is not speaking. Christ was evasive when they questioned him. It is those that cannot *connect* who hasten to cast the first stone. (VL, p.304.)

ヘレンはレナードを憐むがあまり、彼に肉体を許し、そして彼の子を身ごもった。だが、事件の経緯をすべて量った上で、なおヘレンの胸にAの文字を刻み得るいかなるモラル・コードがあるか。もはやこれは道徳律の蓋

然性に見はなされたあまりに悲しい人間の現実だ。モーゼに十戒を与え給うた神は裁いたかも知れぬ。しかし、人間はヘレンを裁くことはできない。人間は人間の論理で結論を出さねばならぬとすれば、その論理とは、我も罪人であるが故に赦すという、ヨハネ伝第8章のあの論理であろう。汝らのうち、罪なきものまず石を擲て。姦淫した女を捕えた人々は、皆去って行った。だが女にとってせめてもの幸運であったのは、律法の絶対性を信奉するパリサイ人ですら、connectし得るだけのイメージーションを持っていたということだ。ウィルコックス氏のような人間の存在が実利主義的な社会の必然であるとするならば、現代において「罪なきものまず石を擲て」とは、あまりにも危険な賭けと言わざるを得ない。

15

It was spoken not only to her husband, but to thousands of men like him — a protest against the inner darkness in high places that comes with a commercial age. Though he would build up his life without her, she could not apologize. He had refused to *connect* on the clearest issue that can be laid before a man, and their love must take the consequence. (XLIII, p.322.)

淪落の生活を送っていたレナードは、シュレーゲル姉妹に詫びたい一心でハワーズ・エンド邸を訪れるが、そこに居合わせたチャールズ・ウィルコックスの怒りに触れ、彼に軍刀で峰打ちを食わされる。それがもとでレナードは心臓麻痺で死んでしまい、チャールズは禁固三年の刑に処せられる。ヘンリーはマーガレットだけを頼りに生活するようになるが、ある日家族会議を開き、ハワーズ・エンド邸をマーガレットに贈与することを発表、さらに後の相続人としてヘレンの生んだ男児を指定する。

*Howards End*の終幕があまりに都合がよすぎる、言い換えれば、あまりにうまく収束しすぎる、とはよく言われることだが、この作品にリアリティーを求めようとすれば、確かにこの評言は当たっている。しかし、私が先に述べたような作品の思想性と象徴性に着目すれば、この作品がある目的論的な流れを持っているとしても不思議ではないだろう。

物語が終局に近づくにしたがって、第三のキー・ワードが可速度的に増えてくる。そのキー・ワードとは‘end’という言葉である(p. 204, 253, 295, 298, 320, 323, 324, 326, 327, 328, 332)。邸宅の名前に付けられたこの言葉は、エンブソンの「曖昧さ」をもって、同時に

「目的」を意味し、作品の「終局」を意味する。そして私が今まで論じてきた 'connect' という語も、テーマ的な意味とは別に、物語の収束のイメージを共示的 (connotative) に持っていると言える。

ではその目的論的な終局とは一体何であるか。それはフォースター自身にもわかっていない。ただ、異次元の事物を結びつけ、赦し合う精神が、何らかの終局／目的、最終的な調和 (ultimate harmony (p.320)) に向かって流れ込んで行くことを、彼は確かに信じていたのである。

